

主日礼拝

2023年6月18日（日）

題 「希望のうちに生きる」

テキスト：使徒言行録2章22～28節

皆さま、おはようございます。

皆様は、誰から聞いた話が本当のことであれば、「こんなにうれしいことはない」と思われたことはあるでしょうか？

今日の聖書の個所は、わたしにとってそのような内容が記されている個所だと思われました。

今日の聖書の個所には、神さまの力である聖霊が降って、地上にキリスト教会が誕生したペンテコステと呼ばれる日に、主イエスの弟子の筆頭格であったペトロが人々に語った言葉が記されています。彼はガリラヤ湖の漁師でしたが、イエス・キリストに「わたしについて来なさい。」と招かれて最初の弟子になった人です。率直で行動力があり、いささか感情の起伏の激しい人でもあったようです。ちなみにこのペトロはその後、カトリック教会では、初代のローマカトリック教会の教皇とされた人物で、その墓を参拝するために建てられたのが、ローマの有名なサン・ピエトロ大聖堂なのです。

ペトロは人々を前に語りかけます。

22:イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。

人に話を聞いてもらうことは、大変なことなのだと思います。

ほとんどの人は、聞く事より話すことが好きなのだと思います。

でも昔から「耳は二つで口は一つ。」と言われるように話すことも大切だけれど、話を聞くことは、話すことの2倍大切なのだということだと思います。

ペトロの話は、自分が従って来た主イエスのことでした。

「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおります。」と

「ナザレの人イエス」とは、ナザレという名の村で育ったイエスという意味です。このイエスこそ神から遣わされた方で天と地を創造された唯一の神の独り子として地上に遣わされた方であると、弟子のペトロは確信しているのです。イエスは生涯を通して、様々な奇跡、病気の人たちの癒しや愛の働きを行われました。わたしたち人間の頭では理解できないような、嵐を静めるなどの自然とも関係する不思議な業、しるしも行われたのです。

主イエスの生涯を記している、新約聖書のマタイやマルコ、ルカやヨハネによる福音書にはイエスの言葉やなされた数々の業が記されています。

イエスは神から遣わされた方、そして天地宇宙を創造された神さまの計画を地上に実現するために、この世にこの現実世界に生まれた神のひとり子だと聖書は伝えています。時は、今から約2000年前です。

神さまが神の子イエスをこの世に派遣した計画の内容とは一体どのようなものでしょうか？それが23節から記されていることです。

23:このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。

24:しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。

ここには、神の子イエスの十字架の死と復活について記されています。つまりこのイエスの十字架と復活の命こそ、神の計画だったのです。それは神の救いの計画だったのです。

神はイエスをこの世に生まれさせ、人々に引き渡された、具体的には当時のユダヤの権力者たちの罪と悪の中に引き渡されたのです。

ユダヤの権力者たちや、それに追従した人々は、つまり、当時ユダヤを支配していたローマ帝国の手を借りて、神の子イエスを十字架につけて殺したのです。「あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。」と言われていることだと受けとめます。なんとという残酷なことか、こんな悪を、受け入れることはできないと思うのです。しかし、イエスさまは地上を生きておられた時、弟子たちに「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」と言われ励まされたのです。これはわたしたちにも向けられた言葉として受けとめたいのです。

確かにイエスの地上の命は十字架の死で終わったのです。

しかし、それには続きがあるのです。

それが24節の言葉です。「24:しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。」これは救済史と言われる人類の救いの歴史理解です。イエスは死んで、復活されたのです。つまり復活のいのちがあるということです。これは創り主なる神さま、愛なる神によって、死の苦しみから解放され、救われた命のことです。このことを信じることの出来る人は本当に

幸いです。

弟子のペトロは、

旧約聖書に出ている紀元前 10 世紀に生きたイスラエルの王ダビデのことばに心動かされて語っています。

25:ダビデは、イエスについてこう言っています。『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、／わたしは決して動揺しない。

主とは、神、救い主であるキリストを表します。イエスが神と共にあることです。

26:だから、わたしの心は楽しみ、／舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。

人は心が安心しないと身体も安定できないのだと思います。ダビデは神と共にあることによって、感謝し、楽しみ、喜んでいるのです。たとえ苦しみの中でも神に感謝し、与えられた人生を感謝し楽しみ、喜んでいるのです。

27:あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、／あなたの聖なる者を／朽ち果てるままにしておかない。

28:あなたは、命に至る道をわたしに示し、／御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』ここは、詩編 16 : 8～11、(P 846) と関係があるとも言われています。

聖書は最初の書物である創世記から御子イエスの誕生、十字架の死と復活、世界の救いの完成を語る黙示録まで、神による被造物の救済・救いの歴史を教えてくれているのです。

神さまは、わたしたちを救うために神の子イエスをこの世界に送ってくださったのです。

この聖書のことばを受け入れることのできる人たちは、「こんなにうれしいことはない」と思いつつ地上を、苦難の中でも希望を持って生かされ生きて行けるのです。

ここに今日集ったわたしたちは、主イエスと神さまを信頼し、人と人とのつながりと大切にしながら、一人一人に与えられている人生を感謝と楽しみ、喜びを持って生きて行きたいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。